

浅海に半熟卵が降ってきて朝鮮戦争を待っている春

石田郁男

上句の比喩表現は、戦争が間近に迫っている予感と読む。殺し合いがはじまる前の不気味な空気の表現である。主語は「春」。地球的な規模の季節が、朝鮮戦争を待っているというのだ。

新学期七歳の子は連れ来たり春の梢のやうな友だち

服部心子

今月は新学期の歌にいくつか出会ったが、中で、下句の新鮮な比喩でこの作が目立った。この年ごろの子供の特徴をうまくとらえている。

牛丼にかける七味と紅生姜おれもおまえも画一化さ

れ 佐佐木定綱

定食屋、ラーメン屋、社員食堂での昼食をうたう八首中の一首。珍しいものを食うことは絶対にならない、そんなマンネリズムの昼食を何か月もつづける悲哀。しかも牛丼には七味と紅シヨウガ、カレーには福神漬とラッキョウなど、トッピングも定番以外はない。

素がゆの波間に漂ふいかなごのくぎ煮旨いぞふるさとの母よ 福崎享子

上句の遊びごころ、下句の歌謡ふうの楽しい調べ、つい口ずさみたくなるような一首である。おいしくて、ついつい心が浮き立つほどなのである。母上はいかなごのくぎ煮で有名な、兵庫県の瀬戸内海沿いの方なのだろう。

朝六時高知駅前バス停で一人の男遍路となりぬ

短歌の現在

No.436

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

青山仁

さしたる動機もなく、自身に対する理由付けもなく、ふと軽い気分で、四国遍路に成ってみた、という軽さが持ち味。人間、〈何かに成る〉のは、あんがい簡単なことなのかもしれないと思わせられる。

夏木立マラソン選手は足ばかりラジオ体操腕ばかり

見ゆ 久松宏二

一読、奇妙な一首だが、角度による見え方の不思議をうたった一首と読む。あえて状況を説明することなく、不思議をそのまま突出させて特色ある作とした。

少しづつ移動しながら花の枝おもしろさうに揺らす

小雀 奥山かほる

雀は遊んでいるのだろう。近年の生物学の研究で、野鳥も遊びをすることが分かってきた。そのことを考え合わせると、子どもの雀でない方がいい。「小」は削除した方がいいだろう。接頭語のつもりでも誤解される。

一人となりし心に沁みる声ペギーの歌う誰もいない

海 黒木幸子

ペギー葉山追悼の歌。ふつう、ペギー葉山というと「南国土佐を後にして」が代表曲のようにいわれるが、ここは意味内容から「誰もいない海」をもってきたようだ。この歌はトワ・エ・モアの歌だが、ペギー葉山もうたっているのだろう。

個人的な思い出を一つ。一度だけ、ペギー葉山さんの歌をすぐ近くで直接聞いたことがあった。彼女は中学か